

2018年度

特別選抜Ⅲ アジア事情探究型（自己推薦入試）

適性検査

一 次の文章を読んで、後の問い（問1～5）に答えなさい。

世界史の教科書では、一八四〇年のアヘン戦争以降、一九四九年の中華人民共和国の成立までを、中国における近代期としている。

そのわけは、アヘン戦争を境に中国が西洋に (a) 門戸を開き、西洋文明を受け入れ、自己の古い王朝体制を変革した、とみなされることによる。(イ) タンテキに言えば、中国史での近代過程は西洋化の過程と (b) 目されている、ということである。

中国の近代過程に対するこの見方は、長い間、誰にも疑われずにきた。特に日本では、日本史で明治以降を近代期とするそのわけが、日本が幕末から明治にかけて鎖国をやめ、西洋に門戸を開き、西洋文明を受け入れて体制を変革したことによる、と一般に理解されてきたため、それと同じように理解される中国の近代過程に何の疑問も感じないできたのである。

だが、このような西洋化過程イコール近代過程という見方は、アジアのどこの国にも適応できるというものではない。たとえばベトナムやインドでは、(1) 西洋化過程とは同時に植民地化過程でもあるから、それをそのまま近代過程とみなしてしまうと、ベトナムやインドの反植民地運動の抵抗を近代過程から外してしまうことになる。

アジアにとっての近代過程を西洋化過程だけに単純化してしまうわけにはいかないのである。同じことは中国についてもいえる。

この百年間をとってみてみた場合、中国で最も大きな変革は、何といっても土地の公有化である。すでに唐代から千年以上続いてきた土地の私有制が (c) 覆|されたについては、中国儒教の均平思想の伝統を考慮せずにはおれない。つまり毛沢東の土地革命は、西洋近代化過程とは (ロ) ムエン|の、伝統思想の近代化として実現したものである。その土地革命の淵源をさぐっていくと、十七世紀の黄宗羲という儒教思想家の田土均分論にたどりつく。

近代過程をこのように西洋化一本ではなく、その国の伝統的なものを軸とした自己変革の過程としてとらえると、近代化の課題も、西洋化一本やりというのとは、自ずから異なったものになってくる。まして、西洋化されればされるほどよいとする倒錯した価値観に惑わされることもなくなる。

分りやすくいえば、外からの力ではなく、内の力を土台にしたところ、つまり A の中に、真の近代化はある、ということなのだ。

近代というのは、もともとはヨーロッパ史上の時代区分をさす歴史概念であったが、その時代にヨーロッパにもたらされた新しい歴史事象、たとえば産業革命や市民革命が歴史の進歩として印象づけられたため、近代という語は進歩という価値を示す価値概念の語となった。

明治より以来、日本人は長い間このヨーロッパ渡来の近代という価値概念にとらわれ、ヨーロッパを先進、アジアを後進とみなし、先進の仲間入りを目ざしてきた。

ところが苦勞の(い)カイあつてやつと先進の仲間入りを果したと思ったこの頃、それより早くヨーロッパにポストモダンの風潮がおこり、近代という価値それ自体を自己否定しはじめた。折しも、日本でも、公害その他、工業や科学技術の進歩によってもたらされる弊害に気づきはじめていたので、時代に(二)エイピンな青年層の間に、ポストモダンの風潮はあつという間にひろまった。

それと歩を合わせるかのように、先進・後進という縦軸思考の価値概念がくずれ、まず青年層の間からアジアに対する(だ)蔑視感情が消えていった。

わたくしは、先進・後進という縦軸価値観がくずれたことを喜ばしく思う。そして、あらゆる民族がそれぞれの歴史価値をもつと考える、横軸思考の、多元的な価値観が広まりつつあるのを歓迎する。

しかしその一方、(2)日本がポストモダンであつていいのか、と強く思う。ポストモダンというのは漢字で書けば後近代であるが、日本は近代を後にしたどころか、多くの点ではまだ前近代にとどまっているのではないか。

誰しもが思うところは政治の世界の前近代性であろう。利権構造とそれを支える集票マシン、いみじくも「お国家老」気取りの地方ボスと買収・供応システム、貧しさを背景とした公共算分捕りの地域エゴ、そのエゴにのつて利益誘導する代議士（その四〇パーセントが<sup>(ホ)</sup>セシユウ議員であることに留意されよ）、それら代議士を束ねる派閥ボス、派閥ボスに金を献上して購われる大臣の椅子、……。日本では、政治を前近代に置き去りにしたまま、ポストモダンの波を頭からかぶっているのだ。

イギリスで、買収や供応に対して刑罰だけでなく被選挙権<sup>(e)</sup>剥奪を以て対処する、腐敗行為・違法行為防止法が成立したのは一八八三年、一世紀以上も昔のことであった。　（溝口雄三『中国思想のエッセンス』東徃西来』による）

問1 傍線部(a)～(e)の漢字を平仮名にしなさい。(配点15点)

(a) 門戸

(b) 目

(c) 覆

(d) 蔑視

(e) 剥奪

問2 波線部(イ)～(ホ)の片仮名を漢字にしなさい。(配点15点)

(イ) タンテキ

(ロ) ムエン

(ハ) カイ

(ニ) エイビン

(ホ) セシユウ

問3 傍線部(1)「西洋化過程とは同時に植民地化過程でもある」とあるが、東南アジアで植民地化過程を経なかったのは、

次の5カ国のうちのどれか、番号で答えなさい。(配点5点)

- ① カンボジア
- ② タイ
- ③ ミャンマー
- ④ マレーシア
- ⑤ インドネシア



二

次の文章を読んで、後の問い（問1～5）に答えなさい。

中国には日本に関するワンテーマ月刊誌『知日』が2011年に創刊して毎月5万～10万部も売れているそうである。中国の人気経済誌の『財経』ですら公称40万部。日本だけにテーマを絞った若者向け情報誌が10万部も売れているというのは、中国の日本好きを証明する十分な根拠になるのではないだろうか。（中略）

2015年1月、この雑誌の編集長・蘇静とアートディレクター・馬仕睿が来日し、（中略）日本語版『知日』の刊行に合わせて東京で記者会見を開いたので、私も参加した。このとき、彼らにこんな質問をした。なぜ、日本に(a)惹かれるのか。あなたがたが惹かれる日本は、あなたがたの親世代が(b)文革後から改革開放期にかけて惹かれた日本と同じものなのか。その時の答えは次のようなものだった。

蘇静はこう答えた。

「私たちの親世代と私たちの日本への関心は大きく違うと思います。私たちの日本への関心は主にネットで個人々がアクセスしている。ですから、非常に多様です。

例えば、日本の『枯山水』。これは、最初は米国のIT長者たちの間で非常に流行している、というところから中国の若者に知られました。それが、実は日本の伝統文化であるということ、あとで知ったのです。あと、中国の若者に人気のある小魅族というスマートフォンブランドのイメージは侘寂わびさびという概念で売り出しています。その経営者から、侘寂で宣伝してくれ、とも頼まれました。これはステイブ・ジヨブズらが侘寂に(b)傾倒したからなんだと思います。

日本のものが米国から入ってきたり、それで興味を持ったりと、今の中国人の日本に対する関口は広いのです。よく『知日』のテーマのネタがいつまでもつかと、周囲の人から心配されるのですが、私はあと5年、10年、ネタが尽きる気がしません」

(中略)

80〜90年代の日本ブームは、日本製映画やテレビドラマが中国国内で解禁され、それと連動して政治的にも日中友好ムードが盛り上げられた。日本を好きになることは、政治的に正しかったから、安心して日本を好きになれた。もし、政治的に関係が悪化していたら、日本好きを公言することはできなかったかもしれない。だが、今の若者はインターネットを通して、世界中から自分の好みのものをかき集める。そうやって(口)自分の興味の赴くままに、世界中から好きなものを集めてみたら、全部日本のものだった、という。

若者世代の親日は同じ親日でも、親世代のように政治の色もついておらず、単一でもないのだ。だからこそ、日本はこういう国だ、という固定したイメージもあまりない。また政治的に日中関係が冷え込んでいたとしても余り関係ない。もつと知りたい、日本の新しい面を見つきたいと好奇心がわく、ということだろう。

彼らの親世代の日本好き、親日が不純なものとは決して思わないが、「日中友好」という政治用語で象徴された時代であって、そのブームは政府の誘導があったとはいえる。同じように、21世紀に入ってからからの反日世論の台頭も政府の誘導の結果といえる。

反日世論が台頭し、日系企業、工場が焼き討ちや掠奪にあうような反日暴動が起きる時代でも、日本が好きだという若者が存在する。多数派とはいえないかもしれないけれど、日本への興味が確実に広がっていることに、日本はもつと自信を持つていいのではないかと思う。政治関係が冷え込んでいる時代に、日本だから好きになったのではなく、いいと思うものが日本だったというのは、日本の文化の實力を証明しているといえるだろう。

さらに興味深かったのは、そういった日本文化のルーツが実は中国にあったということ、若い中国人の彼が今さらながらに発見して驚いているという点だ。



禅も、侘寂の美意識を広めた茶道もそのルーツは中国の禅宗にある。禅宗はインド仏教僧、達磨だるま大師が中国で開いた(c)宗派だ。  
(中略)

中国から移植された文化は、日本独自の伝統文化として完成され、今なお受け継がれて、世界に発信されている。iPhoneの大ヒットで世界を夢中にさせた故ステイブ・ジョブズがアップルを創業するか禅僧になるか迷ったほど禅に傾倒していた話は有名だ。砂利の上に描かれた流水紋様と庭石だけで、あとは鑑賞者の想像力に頼って山水や大海の風景を表現するという日本の禅宗寺院が完成させた枯山水庭園がiPhoneの一見シンプルだが、利用者が無限の可能性を発見するというコンセプトの源だという。中国の禅は明代になって急激に(d)衰退していき、もうほとんど絶えたといっている。一方、日本の禅は枯山水庭園や、茶の湯の侘寂といった精神性を備えた美意識・価値観を完成させ、それは現代文化と融合して新しいものが生み出せるほど(e)汎用性を持っている。iPhoneに中国の若者も、日本の若者も夢中になったが、そこに枯山水の美意識・価値観が隠されていたということは、おそらくジョブズの講演を聞いたり、伝記を読まなければ気づかなかつたかもしれない。だが、そこに枯山水があるのだと聞けば、ああ、なるほどと誰もが納得する。

おそらくは、日本のソフトパワーの本質は、この他国の文化を受容し、己の文化として変容、発展させたあと、また別の国にすんなり受容される柔軟さではないか。別の国の文化に受容され変容したあとでも、核となる精神性が日本固有のものであると、誰もが納得できるほどはつきりしているのも特徴だ。米国でセレブに流行した禅も、日本から伝わりiPhoneといった形で米国流に形を変えて受容された。(h)世界各国で人気の寿司も、日本の寿司職人を見ると、これは違う、と思うまでに変容したものが多々あるだろうが、やはり、そこに日本の伝統食の寿司の心や形を見出すことはできるのである。

受容され変容され、世界のあちこちに拡散されている日本の伝統文化は、だが、その中にまるで歴史を詰め込むように、そのルーツの中国の禅の姿や、茶の湯の姿をもとどめている。中国人が、日本文化に心惹かれるのは、その中に息づく失われた



